

TruPhase の活用(24)
—音源の位相確認(24)—

1. はじめに

TruPhase の位相反転機能を利用して音源の位相確認を行っていますが、前報(23)に引き続き CD の位相確認を行います。

2. TruPhase の位相反転機能による音源の位相確認計画

前報(8)と同様、前報(1)と同じ経路で CD の位相確認を行いつつ、バッハの CD を聴いていきます。

CD ドライブ→fidata HFAS1-S10→Brooklyn DAC+→TruPhase
→300B シングルアンプ

試聴した CD 音源は、バッハの作品で下記のとおりです。

EXTON OVCL-00162

J.S.Bach ヴィオラ・ダ・ガンバソナタ 1 番他
ラデク・パボラーク(ホルン)
ヤン・ベトル(ピアノ)

MDG 619 0989-2

J.S.Bach フーガの技法
Calefex Reed Quintet

GENUIN GEN 110209

J.S.Bach オーボエ協奏曲
ラモン・オルテガ・クエロ(オーボエ)
ペーター・ライナー指揮ポツダム室内アカデミー

3. TruPhase の位相反転機能による音源の位相確認結果

上記 CD について、Brooklyn DAC+での位相反転と TruPhase での位相反転の結果が同じになるかどうか焦点です。

音量調整を容易にするため、Brooklyn DAC+では位相反転させず、TruPhase で位相反転させた状態で TruPhase のヴォリュームを固定し、TruPhase での位相反転では、Brooklyn DAC+でのヴォリュームでの調整だけにしました。

そして、Brooklyn DAC+では位相反転させないで、TruPhase での位相反転有り無しで聴いていきます。

ラデク・パボラークとヤン・ベトル盤は、ヴィオラ・ダ・ガンバの曲のホルン演奏用

への編曲版です。位相反転させますと、ホルンは元来音像が広がっているものですが、ピアノの定位が悪くなります。位相反転させないとピアノの定位がしっかりして、ホルンの音の質感も分かりやすくなってきます。

Calefex Reed Quintet 盤は、フーガの技法の木管 5 重奏への編曲版です。位相反転させますと、定位が曖昧になり、楽器の位置関係が分かりにくくなります。位相反転させないと楽器の位置関係が明瞭になり、それぞれの質感が捉えられやすくなり、編曲の面白みがでてきます。

ラモン・オルテガ・クエロ盤は、位相反転させますと、定位が曖昧になり、オーボエの音像が過大になります。位相反転させないと古楽アンサンブルの前報中央にオーボエが定位し、音の焦点があってきます。

4. まとめ

上記 3 盤とも正相であることが分かりました。

以上